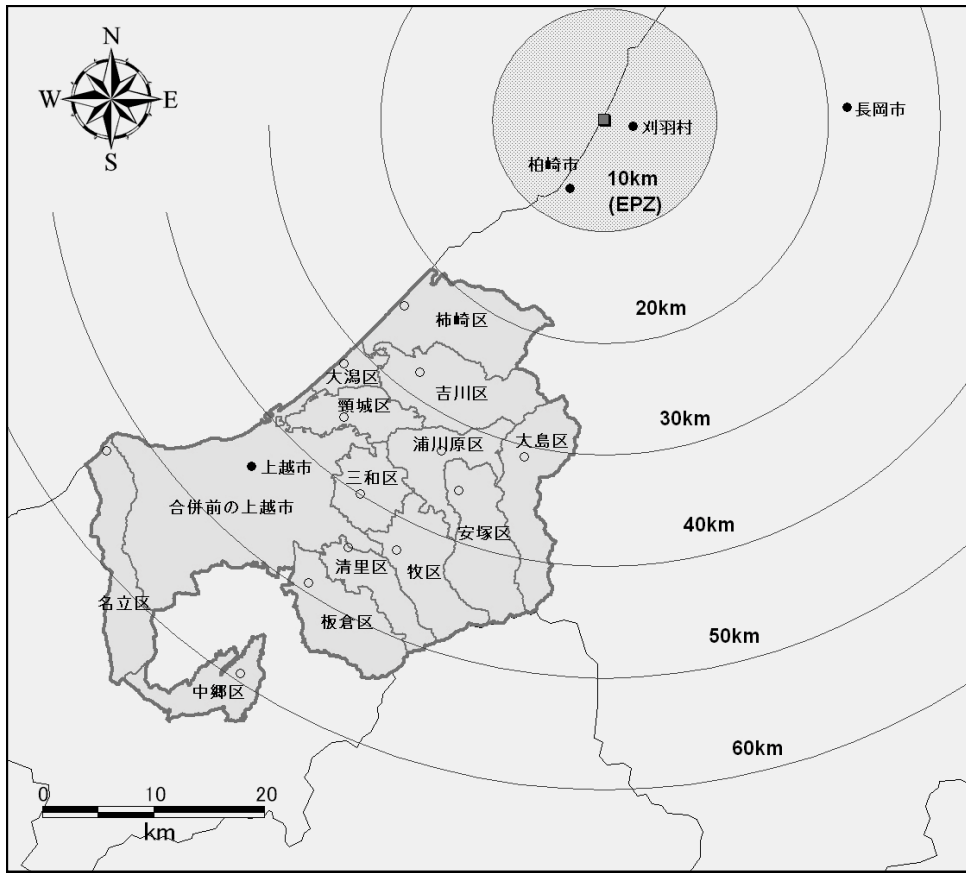


●は市役所木田庁舎、○は13区総合事務所



# 被災者救援・復興、原子力行政の転換を 「原発新增設の計画は見直しも含めて検討」と菅首相

未曾有の規模となった東日本大震災。地震と津波への備えに欠けた東京電力福島第1原発が引き起こした重大事故は、外部への放射性物質の流出が拡大する深刻な状態を続けています。

日本共産党の志位和夫委員長は先月31日、菅直人首相に、被災者支援と復興、原発の危機打開と原発政策の見直しなどについて申し入れました。

このなかで志位委員長は、復興財源についてふれ、予算の大規模補正が必要だとのべ、とりわけ合計で2兆円にのぼる法人税減税と証券優

遇税制の延長は中止が必要だと提起。244兆円に積みあがった大企業の内部留保を活用するために、従来の国債とは別建てで「震災復興国債」を発行し、大企業に引き受けを要請することを提案しました。

菅首相は、法人税減税については「見直しを含めて検討したい」と表明。証券優遇税制の延長中止についても「検討の土俵に乗せたい」と答えました。「復興国債」を大企業に引き受けさせる問題では、「初めての提案なので、よく研究させていただきたい」と答えています。

菅首相は原発の総点検や、新增設については「見直しも含めて検討したい」と約束しました。原発の規制機関を推進機関から独立させるべきだとの志位委員長の提案にも、首相はその必要を認めました。当然です。

## 地域防災計画見直し、待ったなし

今回、東京電力福島第1原発が引き起こした重大事故によって、新潟県や上越市などの地域防災計画の見直しは待ったなしとなりました。これまでの計画は、「原子力防災対策を重点的にすすめるべき地域は原発から10キロ圏内」とした国の指針を前提にして作成されているからです。

上越市の地域防災計画の中で、原子力防災対策は一般災害対策編

の一部として扱われています。独立した原子力災害対策編にし、内容の見直しが必要です。

## 市内公共施設の復旧などで 1億8798万円の補正予算専決

村山市長は1日、東北太平洋地震や長野県北部地震に伴い、市民避難所開設に要する経費や市内公共施設の復旧経費、市外被災者受け入れに要する経費などを措置するため、1億8798万円を補正する一般会計予算の専決処分を行いました。



歳出の主なものは、東日本大震災災害支援費で1億1757万円、大島農業実習交流センター管理運営費23万円、道路橋梁災害復旧費550万円、観光施設災害復旧費で5262万円などです。（写真は大島区直浦―西沢の農道）これらについては、財政調整基金を繰り入れて対応します。

## 苗代などの緊急消雪促進対策でも 1970万円の補正予算専決

市長は6日、消雪の遅れにより農作物の安定生産に支障をきたすとして、消雪促進対策経費を措置するため、1970万円を補正する一般会計予算を専決処分しました。詳細は各区総合事務所産業建設グループにお尋ねください。

苗代除雪などへの支援については、3月議会の文教経済常任委員会でも日本共産党の上野公悦議員などが対応策を求めていました。



待ち遠しかった春がやってきました。春といえば山菜です。わが家で一番早く山菜採りに出かけるのは母です。長年の経験から、何が、どんな時期に採れるかを知りつくして、かなり前からフキノトウ採りなどに出かけています。

思いついたら、すぐに出かけ、ちよつとの期間でも楽しむ。母の山菜採りの流儀です。先日、知らぬ間にフキノトウを採りに出かけてきました。家に戻ってから、母は大きくふくらんだ愛用のナツプサクをコタツのそばまで持ち込みました。収穫したものを改めて見てみたかったのでしよう。

ナツプサクに入っていたものを次々と出す様子を見ていて、びっくりしました。フキノトウにまじって栗の実が入っていたのです。それも、一個や二個ではありませぬ、一升枡一杯ほどあったのです。なかには、虫食いのものもありましたが、とがったところの皮が割れはじめているほかは、秋に採れるものと姿形は変わりありません。色艶もまずまずでした。

母によると、フキノトウを探していて、雑木林の中に入り込んだら、枯れ草の下に栗の実を見つけたといいます。話を聞いた時、最初は信じられませんでした。餌が少なくなる冬を迎える前に、ノネズミやカケスなどの動物たちが落ちてくる栗を放っておくわけがないと思っただけです。

ただ、母が拾ってきた栗の量が量です、一個や二個なら、かろうじて食べられずに残ったという見方も成り立つかもしれませんが、そうではないのです。ひよつとすると、栗の実が食べられる状態で冬を越すことを知らなかったのは私だけだったのかも知れない、そう思って、わが家の牛舎周辺にある栗の木の下へ行ってみました。

栗の木のまわりはすでに雪解けがすすみ、土が出ていました。地面には雪に押しつぶされた栗の葉が一面に広がっています。栗の毬（いが）もありました。これらもすべてぺしやんこになっています。

さて、栗の実があるかどうか。長靴で毬栗（いがぐり）をいくつかひっくり返しているうちに、焦げ茶色の栗の実がころりと出てきました。栗の先っぽのところを割れ、何か実がから出ようとしています。ドングリと同じように根になるものかも知れません。実についた泥を落とし、皮をむいてみました。実は硬く、しつかりしています。見つけた栗の実が三個だけでしたが、いずれも腐っておらず、まともなものばかりでした。栗の実が食べられる状態で冬を越していたのです。

母は栗の実を家に持ってきた時、「こんがな時に栗拾ったが初めてだ」と大喜びでした。どうやら、どう料理するか、誰に食べてもらおうかと、すぐ考えたようです。汚れを洗い落とした後、母は栗の実をボールに入れ、炬燵にのせたテーブルの上に運びました。古い新聞紙を広げると、大きな包丁を使って栗の皮をむき始めました。むかれた栗の実がはしまりが出て、色も良く、とてもきれいでした。「ほら、ひとつ食べてみるか」差し出された白い栗の実を噛んでみたら、軽い音がして、とてもいい感じです。甘味も思っていた以上でした。

栗の皮をむいた翌日、母は栗の実を入れて赤飯を炊きました。赤飯は母の得意料理のひとつです。金沢市に住んでいる次男のところへ長女が行ってくるというので、土産に持たせました。その日の夜、次男から電話をもらった母はニコニコして言いました。「ゲンキ、うんまかったと」

## 将来の夢を見つけ、何事にも前向きに

### 吉川高等特別支援学校の第1回入学式で大平さんが「誓いの言葉」

7日、新潟県立吉川高等特別支援学校の入学式に参加してきました。旧吉川高等学校の校舎を活用してスタートした高等特別支援学校の記念すべき第1回の入学式です。入学者は15名。教職員は17人体制です。

赤松校長は式辞の中で、「みなさんはこの学校が開校して、記念すべき1回目の入学生。スタートにあたり、イチロー選手の言葉を贈ります。いままで生きてきてみなさんに言えることはひとつだけ、それは**夢を持ち続けること**です。夢を持つことは簡単ですが、持ち続けるということはとても大切。途中でいやになってあきらめなくなることもある。でも**あきらめない限り夢は近付いてきます**」と激励しました。

来賓の祝辞は開校支援準備会の小山正昭会長です。「制服すばらしいですね。みなさんの制服姿を見たらほんとによかったなと思いました」からはじまり、「みなさんは初めての土地で、初めての学校ですね。ドキドキしておられるのではないのでしょうか。私たちもそうです。3年間ありますので、みなさんと相談し合い、触れ合う機会を多くもって、理解を深めていきたいと思ひます。3年の間に、健やかに、たくましくなって卒業されることを願っています。保護者の皆さ

んと一緒に頑張っています」と連帯の挨拶をされました。これまで地域の支援組織の代表として頑張ってきた思いがにじみ出た素敵な挨拶でした。

15名の入学者を代表して「誓いの言葉」をのべたのは大平達也さんです。「きょう、待望の入学式を迎えました。新しい学校生活の一步を踏み出し、希望で胸がいっぱいです。これから様々な行事や体験を通して将来の夢を見つけ、それに向かって精一杯努力していきたい。充実した3年間を送るため、仲間と助け合い、何事にも前向きに取り組んでいきたいと思ひます」とのべると、大きな拍手に包まれました。



緊張した新入生を前に式辞を述べる赤松校長